

日本語において抽象格と形態格を区別する意義—無助詞の分析—

坂本瑞生（東北大学大学院生）¹・山下大希（名古屋大学大学院生）²

1. 日本語における無助詞項

現代日本語共通語では、格助詞を伴わない「無助詞」形式の名詞句が現れる場合がある。無助詞の分布制限については先行研究に一定の蓄積がある。まず、名詞句が主題であると解釈できる場合は、ほとんど常に無助詞が許される(丹羽(1989))。

- (1) a. 太郎 {が/Ø} 来たよ
- b. そのコップ {を/Ø} 持ってきて
- c. このコート {で/Ø} 太郎がよく練習してたよ
- d. あの子 {と/Ø} 太郎は昔つきあってたんだって
- e. この桃 {から/Ø} 桃太郎が生まれたんだよ

((1c-e)は丹羽(1989: 42)より引用)

名詞句が非主題の場合、後置詞句（デ・ト・カラ等）は無助詞と交替できない(=2))。「ヲ」格項は基本的に無助詞を許す一方で(=3))、「ガ」格項は非対格自動詞主語の場合に限って無助詞を許す(=4), (5))。まとめると、内項を表示する格助詞「ガ」「ヲ」は無助詞を許す。

- (2) a. 太郎がよくコート {で/*Ø} 練習してたよ
- b. 太郎が花子 {と/*Ø} 昔つきあってたんだって
- c. 桃太郎って桃 {から/*Ø} 生まれたんだよ (丹羽(1989: 42))
- (3) a. 子供達が本 {を/Ø} 読むの見たことない
- b. この近くにタバコ {を/Ø} 売ってる店ありませんか? (影山(1993: 56))
- (4) a. 顔にご飯粒 {が/Ø} ついているの知ってる? [非対格自動詞]
- b. 交通事故 {が/Ø} 起こるところ見たことある? [非対格自動詞] (ibid.)
- (5) a. 子供たち {が/*Ø} 騒ぐの見たことない。 [非能格自動詞]
- b. 患者 {が/*Ø} あばれたの知ってますか? [非能格自動詞] (ibid.)

ただし、非動詞述語の「ガ」格項は内項であるにもかかわらず無助詞を許さない。

- (6) a. 太郎 {が/*Ø} 学生だ [名詞述語]
- b. 花 {が/*Ø} きれいだ [形容詞述語]

以上をまとめると、無助詞の分布について次の記述的整理が得られることになる。

- (7) a. 主題の場合、無助詞が可能である
- b. 非主題の場合、動詞述語の直接内項に限って、無助詞が可能である。

本発表は、(7)に対して、格付与の統語論的メカニズムに基づいて原理的説明を与える。

¹ mizuki.sakamoto.p7@dc.tohoku.ac.jp

² yama421shita@icloud.com

2. 仮定と提案

本発表は格付与の統語的メカニズムについて理論的提案を行い、その帰結として(7)のパラダイムに原理的説明を与える。本節では、生成統語論の枠組みにおける格付与メカニズムについて概観するとともに、形態格と抽象格を区別するという本論の提案を導入する。

2.1. 提案：形態格と抽象格

ドイツ語のように格標示にかかわる形態変化が豊かな言語では、名詞句は適切な格標示を受けなければならない。(8)の例では、「その男(Mann)/学生(Student)」が主語である(8a)では冠詞が主格 *der* に、目的語である(8b)では対格 *den* に形態変化している。

- (8) a. **Der Mann/Student** hat den Lehrer gesehen
the_{NOM} man/student_{NOM} has the_{ACC} teacher seen
‘The man/student has seen the teacher.’ (その男/学生はその先生を見た)
- b. Der Lehrer hat **den Mann/Studenten** gesehen
the_{NOM} teacher has the_{ACC} man/student seen
‘The teacher has seen the man/student.’ (その先生はその男/学生を見た)
- (Haegeman (1994: 158))

形態的な格標示をほとんど欠く英語においても、形態的には空の抽象格が構造的に与えられると考えることで同様の分析が行われる。名詞句が(形態／抽象)格を持たなければならないという制約は(9)の格フィルター(Case Filter)として定式化される³。

- (9) Case Filter: *NP if NP has phonetic content and has no Case. (Chomsky (1981: 49))

日本語は格助詞によって形態的に格を標示する言語であり、その意味で格助詞は形態格標識であると言える。このように考えた場合、無助詞名詞句は形態格を欠くために格フィルター違反を引き起こすことが予想されるが、実際には(7)の環境ならば、形態格を欠いても非文法性を生じない。これは何故なのだろうか。本発表では、日本語にはドイツ語のような形態格(格助詞)のほかに、統語構造に応じて与えられる音形を持たない抽象格が存在していると考えerことでこの問題に解答を与える⁴。

- (10) 提案：日本語は形態格(格助詞)と抽象格の両方を有する

以下、形態格を「ガ格」「ヲ格」、抽象格を[NOM][ACC]と呼び分けることにする。

(10)の提案の下で、名詞句は形態格または抽象格を持つことで格フィルターを満たすこ

³ 格フィルターに抽象格と形態格の両方を含める考えについては三原(1994: 31-35)を参照。

⁴ 形態格と抽象格を区別するという考えは Kuroda (1988)の議論に基づいている。なお、国語学の文脈でも同様の着想が見て取れる。青木(1992)では、格助詞(＝形態格)の機能として、与えられていない格を付与する「格付与」と、既に決定された格を確認する「格確認」の二種が立てられる。「格確認」の場合には、述語の「統括機能」によって格が決定するとされる。この「統括機能」は、本文でいうところの「抽象格」に機能としては等しい。

とになる。そのため、抽象格を持つ名詞句は形態格を持たずとも適切に認可され得るために無助詞を許す。他方、抽象格を持たない名詞句は形態格が必須であり、無助詞を許さない。このパラダイムは以下の表のようにまとめられる。

(11)

抽象格と形態格		形態格	
		あり	なし
抽象格	あり	a. 脱落可能な NP+Part	b. 無助詞
	なし	c. 脱落不能な NP+Part	d. 不適格

以下では、(11)のパラダイムによって(7)の記述の一般化を導き出せることを示していく。

2.2. 格付与メカニズムの技術的細部

(11)からの無助詞の分布を予測するためには、抽象格がどのような環境で与えられるかが明示的である必要がある。そこで、抽象格付与に関する理論的想定を以下に導入しよう。

まず、標準的な生成統語論の枠組みに準じて、[NOM]は TP 指定部、[ACC]は VP 補部にある名詞句に付与されると仮定する(Chomsky (1981))。

[NOM]の付与は TP 指定部で行われるが、この TP 指定部という位置は同時に主題素性[TOP]の認可位置でもあると考える(三宅(1995, 1996, 2011))。そのため、[NOM]付与は実質的に主題項に付与されることになる。非主題の主語/外項は vP 指定部の基底生成位置に留まり、その位置で形態格「ガ」を付与される。

[ACC]の付与に関して、[ACC]付与できるのは[+V]素性を持つ語彙範疇、すなわち動詞 V と後置詞 P に限られる(Chomsky (1981))。したがって名詞述語や形容詞述語は格付与子になれない。この仮定は英語の次の例から正当化される。(12a)と(12b)は意味的に等価であるにもかかわらず、後者は非文である。動詞述語 *envy* は[ACC]付与子になって目的語を認可できる一方、形容詞述語 *envious* は格付与子になれないのである。そのため、非動詞述語では(12c)のように of-挿入規則によって代替的に格フィルターを満たす必要がある。

- (12) a. Poirot envies Miss Marple.
b. *Poirot is envious Miss Marple.
c. Poirot is envious of Miss Marple. (Haegeman (1994: 173))

以上をまとめると、我々は以下 2 点を抽象格付与のメカニズムとして仮定することになる。

- (13) a. [NOM]は TP 指定部で主題名詞句に与えられる
b. [ACC]は VP 補部に与えられる。非動詞述語補部には[ACC]は付与されない。

形態格については、フェーズ理論(Chomsky (2001, 2008))を前提に以下の規則を仮定する。

- (14) a. CP phase の転送領域(=TP)にある NP に「ガ」格を付与する
b. v*P phase の転送領域(=VP)にある NP に「ヲ」格を付与する

2.3. TP 指定部における主格と主題：(7a)の導出

前節では、[NOM]の付与について以下の仮定を導入した。

(15) [NOM]は TP 指定部で主題名詞句に与えられる (= (13a))

この仮定により、[NOM]を与えられるのは主題である名詞句に限られる。換言すると、非主題の名詞句は[NOM]を与えられないために（他の抽象格を受け取らない限り）無助詞を許さない。他方、主題である名詞句は[NOM]を付与されるために、抽象格によって格フィルターを満たす。そのため、形態格付与は随意的となり、無助詞が許されることになる。以上、[NOM]付与についての仮定(15)から、無助詞の分布についての記述の一般化(7a)を導き出せることを論じた⁵。

2.4. 2つの「非対格性」：(7b)の導出

本発表は、日本語において形態格と抽象格を区別することを提案する。これによって、いわゆる「非対格性(unaccusativity)」もまた「形態格の非対格性」と「抽象格の非対格性」の2種が認められることになる⁶。つまり、形態格「ヲ」の付与の有無と、抽象格[ACC]の付与の有無を別個に考えることが求められる。以下ではこの点を明確化することで、動詞述語内項が助詞脱落を出来るという(7b)の記述が理論的に予測可能であることを示す。

前節での仮定より、形態格は v*P 環境(=他動詞・非能格自動詞)では「ヲ」格を付与し、vP 環境(=非対格自動詞・非動詞述語)では「ヲ」格を付与しない(=CP phase で「ガ」格を内項に付与する)。他方、抽象格[ACC]は、[+V]述語の補部には付与され、[-V]述語の補部には付与されない。このことを整理すると、内項の格付与体系は以下の通りになる。

(16)

2つの非対格性		形態格	
		対格付与有 (v*P phase)	対格付与無 (non-phase)
抽象格	対格付与有 ([+V])	a. 他動詞内項	b. いわゆる非対格自動詞
	対格付与無 ([-V])	c. ---	d. 非動詞述語

この整理のもとでは、いわゆる「非対格自動詞」の非対格性は「形態格を付与しない」ということによる非対格性と理解されることになり、抽象格の面では[ACC]を付与する格付与子として振舞うことになる。他方、抽象格の点での非対格性は述語品詞に対応する⁷。

⁵ 本論では形態格と抽象格を独立して付与されるものとする。そのため、「ヲ」格標示された名詞句が同時に[NOM]付与される、といった格付与パターンも問題ない。(1b-e)の派生では、非主語名詞句が TP 指定部の位置で [NOM]付与されて無助詞が認可される。

⁶ 非対格性の仮説に基づく「非能格／非対格自動詞」の区別は影山(1993, 1996)や三宅(2017)を参照。同様の着想は三上(1953)の「能動詞／所動詞」の区別にも認められる。

⁷ 形態格「ヲ」は v*P phase の存在に依拠している。v*が外項へ意味役割付与をすることを踏まえると、「ヲ」格付与は外項への意味役割付与を必ず伴うことになる。換言すると、日本語では、いわゆる「ブルツィオの一般化」は形態格付与に関して成立することになる。

以上の枠組みでは、「内項の無助詞が許される」ことは「内項に抽象格[ACC]が付与される」ことに等しい。これは、述語が[+V]素性を持つ場合に該当する。したがって、本論の提案のもとでは、動詞述語の直接内項は無助詞を許す(=抽象格を付与される)一方、非動詞述語の直接内項は無助詞を許さない(=抽象格を付与されない)ことを説明できる。他動詞・非対格自動詞・非動詞述語の内項の格付与パターンをそれぞれ以下に示そう。下線部が形態格「ヲ」の付与領域、波線部が形態格「ガ」の付与領域である。(17c)の名詞述語「学生(だ)」は[-V]であるために[ACC]を付与せず、したがって無助詞を許さないのである。

(17) a. [CP [TP [NP 子供たちが] [VP [本{を/∅}] 読む]]] の 見たことない (= (3))

[ACC]

b. [CP [TP [VP 顔に [ご飯粒 {が/∅} 知っている]]] の] 知ってる? (= (4))

[ACC]

c. [CP [TP [NP [太郎 {が/∅} 学生]]] だ] (= (6a))

以上、本論の提案から導かれる 2 つの非対格性によって (7b) が導かれることを示した。

3. 更なる帰結

前節では、日本語において形態格と抽象格を区別するべきだという主張を提起し、その区別に基づいて無助詞の分布についての記述的一般化(7)を導出できるを見た。特に (7b) の導出に際して、「形態格の非対格性」と「抽象格の非対格性」を区別するという観点から説明を与えた。この 2 つの非対格性から得られる予測は以下の通りにまとめられる。

(18) [+V]要素の投射の補部は無助詞を許す

(18)は①投射主要部が[+V]であることと、②項が補部に生起していること、の 2 つの要件から成り立っている。したがって、いずれかの条件が満たされない場合には無助詞が許されないことが予測される。以下、この予測を確かめることで、本論の分析に支持を与える。

3.1. 投射の主要部が[+V]ではない場合

まずは、1 つ目の条件「投射の主要部が[+V]である」を満たさない事例を 2 つ確認する。第一に、属格「ノ」が原則脱落できないという事実を挙げることができる。

(19) a. 山田 {の/*∅} 本 / b. 山田 {の/*∅} 親戚

この事実は、本論の枠組みにおいて次のように説明できる。句全体は名詞の投射である名詞句を構成しており、主要部は N である。これは[-V]の投射であるので、いかなる抽象格も付与しない。他方、名詞句が仮にフェーズ DP (あるいは n*P) を形成して形態格付与領域を構成するとすると、形態格「ノ」を付与することはできる。したがって、形態格「ノ」が付与される場合に限って、属格要素は格フィルターを満たすことができる。換言すると、属格要素は無助詞を許さないのである。これは経験的事実と合致する。

第二の事例として、付帯状況をあらわす「A を B に」構文を挙げよう (cf. 村木(1983)、寺村(1983)、西垣内(2019))。この構文における「ヲ」格もまた無助詞を許さない。

(20) 地図 {を/*∅} たよりに駅を目指した

「A を B に」が B を主要部とする名詞句を構成するとすると、(20)は概略、次のような統語構造を持つと考えることができる。下線部は主節 v*P の「ヲ」格付与領域である。

(21) [CP [TP [v*P [VP [NP 地図{を/*Ø} 頼りに] 駅を 目指し-]] -た]

この構造において「地図(を)」は抽象格[ACC]を付与されない。したがって、形態格によって格フィルターを満たす必要があり、無助詞を許さないことが予測される。

以上の分析では、「A を B に」のヲ格は主節 v*P phase によって付与されていると考えている。この分析から、主節述部が non-phase である場合、当該構文は格付与を適切に行えないために非文法性を生じるという予測を導くことができる。そしてその予測の通り、「A を B に」の主節動詞が non-phase の非対格動詞である場合、当該構文は非文法的になる^{8,9}。

(22) a. 地図をたよりに、タカシがその家を見つけた

b. ?? 地図をたよりに、その家が見つかった (西垣内(2019: 44))

以上、「投射の主要部が[+V]である」を満たさない事例において無助詞が許されないことを示した。

3.2. 項が補部に生起していない場合

続いて、2つ目の条件「項が補部に生起している」を満たさない事例を2つ取り上げて検討する。まず二重目的語構文を検討しよう。事実として、二重目的語構文における間接目的語の「ニ」格名詞句は無助詞を許さない。

(23) a. 山田、橋本{に/*Ø} 1万円{を/Ø}渡したらしいよ

b. 山田、1万円{を/Ø}橋本{に/*Ø}渡したらしいよ

c. 直人{に/*Ø} お金をあげる ((23c)は三原・平岩(2006: 209)より引用)

この事実は次のように説明できる。標準的な統語分析に基づけば、間接目的語は VP の指定部、直接目的語は VP の補部に基底生成される(cf. Larson (1988), 三原(2004))¹⁰。

⁸ 寺村(1983)は以下の例を挙げて、「A を B に」構文は主節動詞が「意図的な行為」をあらわすという条件があることを論じており、ここでの観察と同趣旨の指摘と言える。

(i) * 空気の乾燥を原因に、火事が急速に広がった (寺村(1983: 46))

⁹ ただし、B にあたる名詞が出来事と出来事、または出来事と個体の関係を表すような名詞である場合、非対格動詞の制限が解除される。

(i) a. 住民の通報をきっかけに、警察が犯人の居場所をつきとめた

b. 住民の通報をきっかけに、犯人の居場所が判明した (西垣内(2019: 44))

この種の文に対して西垣内は異なる統語構造を提案しており、この統語構造の違いがヲ格付与に関与していると考えられる。この点についての詳細な議論は今後の課題としたい。

¹⁰ 三宅(2011)は、S 構造複合語は姉妹関係にある要素間において成立するという前提をもとに、以下の観察を示して、二重目的語構文では直接目的語が VP 補部であると論じている。

(i) a. 入賞者に[記念品贈呈]の際...

b. * 記念品を[入賞者贈呈]の際... (三宅(2011: 152))

(24) [CP [TP 山田(は) [v*P [VP 橋本(に) 1万円(を) 渡し-]] -た]]

[ACC]

この構造において、[ACC]はVP補部にある直接目的語に付与される。他方、間接目的語は抽象格を付与されない。したがって、直接目的語は助詞脱落を許す一方で、間接目的語は無助詞を許さないという事実が正しく予測される。

VP指定部に位置する項が無助詞を許さないというパラダイムは、認識動詞構文にも認められる。認識動詞構文とは、思考・知覚をあらわす主節動詞の埋め込み節主語が「ヲ」格で標示される構文である。

(25) 山田は[橋本を天才だと]思った (cf. 山田は[橋本が天才だと]思った)

三原(2022)は認識動詞構文の「ヲ」が脱落できないという観察を提示している。

(26) a. 私は局長の行動{を/*Ø}不審に思ったんですね

b. 直人は旧友の好意{を/*Ø}ありがたく感じたらしいぞ (三原(2022: 15))

三原は、これらの観察を「ヲ」が格助詞ではなく後置詞であると仮定することによって(アドホックに)説明している。しかし、本論の枠組みのもとでは二重目的語の間接目的語とパラレルな分析を行うことができる。

認識動詞構文の構造については、三原(2022)ほか標準的な生成統語論の分析に沿って、VP指定部に基底生成されたと考え、(27)の構造を想定する。この構造は、*pro*の位置を顕在的な名詞句で埋めることが可能であることから支持される。

(27) [CP [TP 山田は[v*P [VP 橋本を [CP *pro* 天才だと]思-]] -た]]

(28) 山田は田中を[彼の方こそが間違っている]と思っている (三原(2022: 94))

ここで認識動詞構文の「ヲ」格項はVP指定部に位置しており、補部に位置しているわけではないという点に注意されたい。この構造のために、「ヲ」格項は抽象格[ACC]を付与されず、格フィルター違反を免れるためには形態格「ヲ」を必ず付与されている必要がある。したがって、無助詞が許されないという事実が正しく説明される。

以上、本論の提案から導出される内項の無助詞に関する予測(18)を手引きにして、①属格「ノ」格項、②付帯状況の「ヲ」格項、③二重目的語構文の間接目的語「ニ」格項、④認識動詞構文の「ヲ」格項、が無助詞を許さない事実と統一的な説明を与えた。

4. 結論

本論は、無助詞分布の一般化(29)に対し、格付与の観点から統一的な説明を与えた。本論の枠組みの中心は、形態格と抽象格を区別して考える(30)の提案である。

(29) a. 主題の場合、無助詞が可能である

b. 非主題の場合、動詞述語の直接内項に限って、無助詞が可能である。

(30) 提案：日本語は形態格(格助詞)と抽象格の両方を有する

この提案の下で、「[+V]要素の投射の補部は無助詞を許す」という新たな一般化の整理も行い、その経験的妥当性についても論じた。以上の議論により、格助詞という明示的な格標識を持つ日本語においても、それとは独立に抽象格を区別することの意義を示した。

参考文献

- 青木伶子(1992)『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書院
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(1996)『動詞意味論一言語と認知の接点』くろしお出版
- 寺村秀夫(1983)「「付帯状況」表現の成立の条件―「XヲYニ……スル」という文型をめぐる―」『日本語学』2(10), 38-46.
- 西垣内泰介(2019)「「地図をたよりに」の構造と派生」『日本語文法』19(1), 37-53.
- 丹羽哲也(1989)「無助詞格の機能」『国語国文』58(10), 38-57.
- 三上章(1953)『現代語法序説―シンタクスの試み』刀江書院
- 三原健一(1994)『日本語の統語構造』
- 三原健一(2004)『アスペクト解釈と統語現象』松柏社
- 三原健一(2022)『日本語構文大全第Ⅱ巻 提示機能から見る文法』くろしお出版
- 三原健一・平岩健(2006)『新・日本語の統語構造』松柏社
- 三宅知宏(1995)「日本語の屈折要素と句構造」『日本学報』14, 65-77.
- 三宅知宏(1996)「日本語の主題素性の照合と句構造」『現代日本語研究』3, 17-34.
- 三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェース』くろしお出版
- 三宅知宏(2017)「日本語動詞における「制御性（意図性）」をめぐる一語彙的意味構造と統語構造―」森山卓郎・三宅知宏（編）『語彙論的統語論の新展開』117-134, くろしお出版
- 村木新次郎(1983)「「地図をたよりに、人をたずねる」という言いかた」渡辺実（編）『副用語の研究』267-292, 明治書院
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris Publication.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by M. Kenstowicz, 1-52, Cambridge, MA MIT Press.
- Chomsky, Noam (2008) "On phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by R. Freidin, C. P. Otero and M. L. Zubizarreta, 133-166, Cambridge, MA: MIT Press.
- Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to Government and Binding Theory* (Second Edition), Oxford, UK & Cambridge, USA: Blackwell.
- Kuroda, S.-Y. (1988) "Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese," *Linguistic Investigations* 12(1), 1-47.
- Larson, Richard K. (1988) "On the double object construction," *Linguistic Inquiry* 19(3), 335-391.

謝辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2114（受給者：坂本瑞生）、及び、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2125(受給者：山下大希)の財政支援を受けたものです。